分布：全国（北海道南部以南）

ウツギ　（アジサイ科）

学名：*Deutzia crenata*（ドイツァ クレナータ）

空　木　　別名：卵の花（ウノハナ），雪見草

主な生育場所

里山の日当たりのよい林縁や路傍，崖地などに生える。渓流沿いなど川辺にも多い。また，人家の庭先や生け垣，所有する畑や水田の境界部に目印用に植栽することもある。

名前の由来：幹や枝を折ると，中空であることから空（うつ）ろな木ということでウツギ（空木）。また卵の月（旧暦の4月）に咲くことから卵木とされたともいう。

特　徴

樹高1～3mほどで株立ちする低木。葉は対生し，若枝は赤褐色で星状毛がある。縁に微細な鋸歯があり長さ4～9cm，幅2.5～3.5cmほどの楕円形～卵状披針形の葉は対生する。葉の両面や葉柄にはやや密に星状毛をしく。5～7月に枝先に下向きの白色の花を多数つける。花後，椀形で花柱が残った果実をつけ，晩秋に熟す。

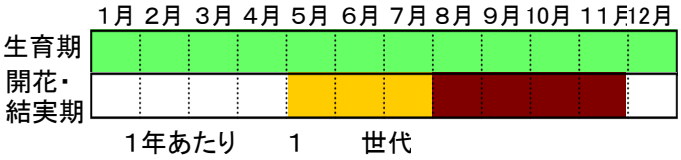
開花期にも前年度の果実が残る

＜農業との関係＞

里山によく見られる清楚な白いウツギの花は邪気を払うと考えられ，生け垣や畑の境界などに植えられてきた。また，開花期が田植えの時期にあたるため，今でも東北地方を中心に水田の水口に花のついたウツギの枝を差し，イネに邪気が宿らないように祈る風習が残る。たくさんの枝を水口に差し，枝先に密生して咲くウツギの花をたわわに稔るイネの穂に見立てて豊作を願ったともされる。

花弁は5枚。花弁よりやや短い雄しべが10本ある

＜生活史＞　　関東 地方の例(目安)



＜類似種＞　関東地方以西には4月ごろから咲き始め，小振りな花がつくヒメウツギが河川沿いの崖地などに見られる。またやや標高の高い山地に育つマルバウツギの葉は卵形で丸い。バイカウツギの花はウツギより大きく芳香があり，花弁は4枚。

梅雨時の林縁を彩るウツギ

＜一言うんちく＞

中空の幹をもつ低木は「ウツギ」と呼ばれることが多く，今回取り上げたアジサイ科のウツギの他に，淡紅色～赤色の花をつけるスイカズラ科のタニウツギや，小降りの花のバラ科のコゴメウツギ，また有毒植物のドクウツギなど多数あり，いずれも里山に身近な植物となっています。

＜人との関わり合い＞

初夏に咲く清楚な卵の花は，万葉歌人の大伴家持が好んで詠んだように，古来からよく知られ，詩歌にもよく取り上げられてきた。同じく初夏の季語であるホトトギスとともに詠われることも多い。唱歌「夏は来ぬ」の冒頭にも「卵の花の匂う垣根に」と取り上げられている。また，関東地方などでは豆腐の絞りかすである「おから」を「から（空）」を連想し縁起が悪いとし，「おから」と同様に白く，小さな花をたくさんつけるウツギの花に喩え「卵の花」と呼ぶ。ただし，ウツギ自体は食材として適さない。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：初夏】　卵の花の過ぎば惜しみか霍公鳥雨間も置かずこゆ鳴きわたる　（大伴家持）
なく声をえやは忍ばぬほととぎす初卯の花の影にかくれて　（柿本人麻呂）
卵の花をかざしに関の晴着かな　（河合會良）　卵の花や神と乞食の中に咲　（小林一茶）
卵の花のこぼるる蕗の広葉かな　（与謝蕪村）　卵の花は日をもちながら曇りけり　（加賀千代女）